

こぎつね 2015年6月

目の記憶 耳の記憶 心の記憶

公文式デュッセルドルフ・オーバーカッセル教室
公文式メアブッシュ教室
指導者 フックス真理子

教室で子どもたちを見ていて常日頃思うのは、子どもたちの記憶する力には大きな違いがあるということだ。特に目立つのは、暗算の習得の速さである。1、2回でどんどん覚えて先に進める子と、何度繰り返しても習得できない子と。引き算になると、覚えられない生徒は、足し算の何倍も苦勞する。私はいつも、どこにこの差の源があるのか、どうしたらそれが克服できるのか知りたくて、真剣に学習の様子を観察しているのだが、残念ながら一度も突き止められたことはない。

ただ一つ経験から言えるのは、公文というのはいかにも「目の記憶」に頼る日本で生まれたものなのだという事。それは私たちの言葉と関係している。日本は漢字文化の国だ。しかし、もともと中国語にあった四声は音読みとして日本に入ってきたときに消え、またそもそも母音の種類が少なく、音節の構造が単純な日本語の中で漢語が自国語として消化された結果、たくさんの同音異義語が生まれた。たとえば、「きこう」という読みをパソコンで変換するだけで、寄稿、気功、機構、気候、寄航、貴校、貴行、起工、起稿、気孔、紀行、紀綱、寄港、季候、帰航、奇行という言葉が現れる。会話の中で、「きこう」という言葉が相手の口から出てきたら、私たちは無意識のうちに、それを漢字に変換して、頭の中でその漢字を見ながら聞いている。

俳句もまた、目の記憶に頼る芸術である。わずか 17 文字の短詩がほとんど無限の広がりを持っているのは、たとえば季語の包含する内容において、とりわけ視覚的に訴えるものが大きいことである。「古池や蛙飛び込む水の音」という句は、静けさの中に蛙が飛び込むその瞬間の音を捉えているが、それは晩春の緑あふれる山の中の古池の状況なしには成立しない。私たちはこの俳句を読むとき、その世界の全体像を目前に思い浮かべながら、俳句の情景を再構成する。日本語はつくづく目の言語なのだと思うし、こういうものが民族の記憶として私たちの中に蓄積されているのだらうと想像できる。

かたや、ドイツ。ドイツに来たばかりの頃、私もせっせと VHS に通い、ドイツ語を学んだ。ちなみに、その頃はまだ公文のドイツ語はなかった。で、VHS の能力分けテストになると、そこそこ文法に強い日本人である私は、結構上級のクラスに振り分けられた。いや、クラスメートのドイツ語の話せるのなんのって！どうして、こんな人が、まだドイツ語なんか習いに来ているのかなと思うほど、みんなほとんどネイティブスピーカー並みに話す。それにひきかえ私の方は、テ

ストは出来るけれど、まったくしゃべれない悲哀。ある日、その劣等生には朗報で、日本から来た Y さんというビジネスマンがクラスに加わった。これでもう一人、しゃべれない仲間が出来た。授業が終わって、彼と話すと、彼は外語大でドイツ語を専攻したそうな。そんなにドイツ語をちゃんと勉強した人ですら、全然話せないのだから、もともと畑違いの私が出来なくて当然だ。ドイツ語を専門的に勉強しようが、しまいが、結果は同じ。だが、すっかりお客様状態の私たち日本人を自己観察してみると、そもそもドイツ語の学び方が他の生徒たちと違うのだと気づかされた。

ギリシャ、イタリア、スペイン、主として南欧系の生徒たちは、耳から言葉を覚える。言葉そのものがたくさんの韻を踏んだりして、音楽的なのではないか。ドイツ語もインド・ヨーロッパ語なのだから、共通するものは多い。要は、彼らはドイツの日常生活の中で、自然に言葉を耳から習得していけるのだ。ところが、私たち日本人は、たとえば小学生の頃何度も何度も国語の8マスノートに漢字を書いて覚えた学習体験が忘れられないから、どうしても、ドイツ語の単語を目で確認しないと不安でいられない。結果として、ある例文を文法的に分析して理解納得し、次にその例文を暗誦して、ドイツ語を覚えていくという学習経過をたどる。しゃべるのは、まず頭で文を思い浮かべてから。だから、反応がワンステップ遅れる。私たちにとって、最初から直接法で、目によらず、耳から聞いてのみ覚えるというのは、至難の業だ。

もっとも視覚に訴える学習法であるならば、必ずしも文型積み上げ式でなくてもよいらしい。最近、大阪で日本語教師をしている親友が書いた修士論文を読む機会があった。彼女が提唱するのは、「多読学習法」。原則が三つあって、①辞書は引かない②わからないところは飛ばす③つまらなければやめる、のだそうだ。従来の文型積み上げ型だと、例文を作るのに無理があって不自然な構文を覚えてしまう、また、単語の多義性が無視されて広がりがないという欠点があるという。これは日本語学習法だが、もともとは日本人の発明した英語多読学習のメソッドだったそうだ。読む、つまり目を通して確認し、情景を思い描きながら読み進むというのは、日本人の認知・記憶構造にはたしかに合っている。こう見てくると、手前味噌ながら、最初に文型積み上げ式、その後ひたすら長文を読ませる公文式ドイツ語は、その折衷型で、ある意味リーズナブルな学習法かもしれない。

冒頭で暗算の話を書いた。公文で繰り返しプリントの問題を解くというのは、数式を何度も見てインプットしているのであり、最終的には、その数式が出てくれば、答えを反射的にさっと書けるようにする訓練である。まさに日本的な学習法といえよう。ドイツの子どもたちが多数公文に来るようになったのは、学校で計算練習が不当に軽視されていることが原因だが、その底流には、目の記憶自体があまり学びの中で重視されていない文化特質があるのかもしれない。それでも、指をずっと使っていたドイツの子どもたちが、プリントに取り組むうちにどんどん暗算が出来るようになるところを見ると、やはり人間の記憶には、目を通しての認知とその蓄積が重要な役割を果たしているのだと思わざるを得ない。

ところで、記憶というのは、そもそも何なのだろう。目や耳という身体の器官を使って、さま

さまざまな事象を自分の中に取り込む行為、いや、生理的な機能なのだろうか。最近、以前の教室便りにも書いた、当教室の OB でアーティストの竹田信平の著書を読んだ。彼は北米・南米の被爆者の声を集めて映画を制作したことがきっかけで、彼らの記憶とどのように関わるかというアートを、声紋を記録するというやり方で表現した。戦後 70 年の今年、長崎県立美術館でも「アンチモニュメント」という挑発的なタイトルでインスタレーションをするという。たとえば戦争の記憶というのは、何処に残るのか。人が死ぬとその記憶も失われていくのか。

おそらく人間は長い間、不思議な思いでこの問いの前に立たされていたのだろう。それについての手がかりとなる考え方として、仏教の中にある唯識という思想を紹介したい。仏教の深層心理学ともいべきこの教えでは、眼・耳・鼻・舌・身という認知、さらにそれを統括する通常の意識、自我の根源とみなされるマナ識、そして最深部に個人の記憶が生まれて以来すべて蓄積されているアラヤ識というものがあり、それが宇宙的な大海に通ずると考える。これは単に神話や夢物語ではない。論理的に考えれば、物事はすべて果てしなく原因と結果によって紡ぎ出されていくのだから、それを表面上私たちが記憶しようがしまいが、現在は常に過去の結果としてあるわけで、その意味では個人に限らずすべての記憶が現在の時空に蓄積されているといっても間違いではない。

つまり、自分を深く掘り下げていくと、記憶の大海に到達し、そのとき私たちは死者の記憶にもまみえることになるし、私の持っている記憶が他者と交わることにもなる。歴史を作るのは、人々の記憶の総和であり、これは一つ一つが代替不可能な存在で、それゆえの尊厳がある。逆に言えば、私たちの学びが、記憶というチャンネルを通して、歴史に関与しうるわけだ。こう思えば、ささいな日常の学びが、実は高度に倫理的な側面を持っていることになる。目の記憶、耳の記憶が、私という歴史の結節点を通して、心の記憶に変わる。その視点から見ると、戦後 70 年の節目に、自分の学びはどのように関わっているか。自問自答することもまた、一つの歴史的行為と言えるだろう。